土居朋子　　INDEX

（エッセイさまざま）

赤い花　　想い出の日々の歌(1)　　（2014．10）
栗の皮　　想い出の日々の歌(2)　　（2014．11）
なこちゃんは　　想い出の日々の歌(3)　　（2014．12）
冬の花　　想い出の日々の歌(4)　　（2015．2）
春が来る　　想い出の日々の歌(5)　　（2015．3）
五月の青空　　想い出の日々の歌(6)　　（2015．5）
新月　　想い出の日々の歌(7)　　（2015．7）
譲る人　　想い出の日々の歌(8)　　（2015．8）
大きな文字　　想い出の日々の歌(9)　　（2015．11）
雪景色　　想い出の日々の歌(10)　　（2016．2）
くぎ煮の春　　想い出の日々の歌(11)　　（2016．4）
コロッポックル　　想い出の日々の歌(12)　　（2016．8）
天城峠を歩く　　想い出の日々の歌(13)　　（2016．11）
正月を待つ　　想い出の日々の歌(14)　　（2017．1）
疑似体験　　想い出の日々の歌(15)　　（2017．7）
どちらかと言うと　　想い出の日々の歌(16)　　（2017．11）
初めてのマレーシア訪問　　（2018．2）
初めてのマレーシア訪問(その2)　　（2018．5）
娘の成長　　想い出の日々の歌(17)　　（2018．9）
4月の雛祭り　　想い出の日々の歌(18)　　（2019．4）
白き十字の花　　思い出の日々の歌(19)　　（2019．7）
私の正月仕事　　（2020．2）
名画ふたたび　　思い出の日々の歌(20)　　（2020．8）
親の知らぬ顔　　思い出の日々の歌(21)　　（2021.9）

赤い花　　想い出の日々の歌(1)　　(2014．10)

土居　朋子　　(西神在住)

古い話になりますが、20歳前後の頃短歌に興味を持ち全くの自己流でぽつぽつと詠んでいました。しかしその後、結婚、出産を経て育児の時期が続き、短歌とは全く縁のない日々を過ごした後、やがて子供たちが高校生・中学生になった頃また詠んでみたいという気持ちが湧いてきました。

数年間カルチャー教室で学び、その時は歌心も充実していたのですが、残念ながら今は歌を忘れたカナリヤとなっています。

今回、編集者の薦めもあり、このホームページにわずかでも彩りを添えることができればと思い披露させていただきます。

幾百の棚田重なるその畔に思いのたけに赤き花咲く

花の名前はなく赤き花とあるのみですが、棚田の畔に咲く花、即ち曼珠沙華と分かるかと思います。別名彼岸花のこの花は、ほとんど時期を違えず秋の彼岸の時期に一斉に花を咲かせます。

たまに白いのもありますが、そのほとんどは赤で畔や土手に固まって、あるいは列になってまっすぐな茎と燃えるような赤い花だけというのは、強い印象と思い切りの良さを感じます。

何のためらいもなく、自分の想いをぶつけているような赤い花。ちなみに、葉は開花終了の後、晩秋に線形の細いのを出します。

昨年、ちょうど彼岸の頃に明日香路を歩くと曼珠沙華が盛りで、その赤、色づいた田んぼ、折しも真っ青な空と見事なコントラストで正に日本の秋の風景でした。

さて冷夏だった今年、彼岸花はいつ頃咲くでしょうか。気になるところです。(9月14日・記)

栗の皮　　想い出の日々の歌(2)　　(2014．11)

土居　朋子　　(西神在住)

栗の皮むくとき聴こえる遠き日の祭り囃子のピーピーヒャララ

秋たけなわのこの時期、列島各地から郷土色豊かな秋祭りの話題が届く。

私の故郷の祭りも10月中旬だが、最近はかっての賑わいとは遥かに遠いようだ。娯楽の少なかった数十年前の田舎では、秋祭りは地域の大きなイベントであり、子供は勿論のこと、大人にとっても大きな楽しみだったように思う。

お神輿が通るのをわくわくしながら待ち、目の前で見たときの高揚感、大勢の人に驚きながらも立ち並んだ露店で何を買おうかとあちこち覗いたことなど、今でもはっきり記憶に残っている。

更に楽しみは祭りの御馳走で、どこの家庭でも小豆入りの栗おこわを用意した。祭りの翌日は運動会と決まっていて、おこわは運動会の弁当にも入ったものだ。

その後歳月を経て家庭を持ったが、夫がこの栗おこわが大好きで、毎年秋になると2、3回は必ず作る。私にとっては懐かしい故郷の祭りに繋がる食べ物で、栗の用意をしていると今でも幼い日の郷愁にかられる。

なこちゃんは　　想い出の日々の歌(3)　　(2014．12)

土居　朋子　　(西神在住)

なこちゃんは任と心得　仏日の父母の通訳す四才にして

今、芸能界ではハーフと呼ばれる人たちが大勢活躍しているが、政治に関心の強いタレントとして知られる春香クリスティーンさんもその1人だ。彼女の父親は日本人、母親はスイス人だが、先日の新聞記事によるとお互いの言語を話せないので、夫婦間では英語での会話になるとか。そして、母親の言語のドイツ語を話せない父親は子供の春香さんに、よく通訳を頼んだとのこと。

この記事を読み、10年近く前のことを思い出した。

夫の姪がフランス人と結婚しパリに住んでいる。その連れ合いと1人娘のなこちゃんを伴い名古屋の実家に里帰りし、我が家にも立ち寄った。

姪の方は堪能とまではいかなくても、日常のフランス語はできていたように思う(フランス語が分かるわけではないのだが)。一方、連れ合いの方は日本語を多少聞き取ることはできても話すことは殆どできず、夫婦の会話はもっぱらフランス語でなされていた。

そんな2人の会話でうまく通じ合わなかった時があり、そばにいたなこちゃんが親に頼まれたわけでもないのに、状況を察してさっと通訳をしたのだ。それは周囲の私達にはできないことで、正に彼女ならではの役目だった。幼いながらもそれができるのは自分と自覚しているなこちゃんに感心したことを覚えている。

春香さんもまた同じだったのでは。

あれから時が流れ、2人はもう通訳の必要はなくなっただろうか。
とんと無沙汰をしている姪達のことに想いを馳せた記事だった。

冬の花　　想い出の日々の歌(4)　　(2015．2)

その顔をみな海に向け水仙は斜面に咲けり潮風受けて

先日、テレビで和歌山の水仙郷を紹介しており、その自然豊かな風景に見入った。
昨今は栽培技術が進んで、野菜・果物など殆ど年中見られるものも多く季節感が乏しくなっている。花もまたその例にもれない。そんな中で水仙はやはり冬の花で、寒い時期にすっとした立ち姿で咲いている様は凛として美しく、また、その香りも快い。
今は外来種や或いは品種改良されたのも多いが、私は馴染み深い日本水仙を一番好ましく思う。かって実家の庭にも毎年花を咲かせており、まだ幼くあまり花の名前も知らない子供の頃から、この花は身近で勿論その名も知っていた。さらに小3の時にクラスで水栽培をして、皆で観察記録をつけたことも遠い日の出来事として懐かしく思い出される。
後年、水仙郷と呼ばれる場所で斜面いっぱいに咲く花を見たときは感激した。晴天で青い空と海、それを背景に濃い緑の葉の間に星の形のような白い花々。その花は皆、海の方、つまり南に向いておりテレビでは分からないことだった。
20年前の阪神淡路大震災の後、両陛下が被災地のお見舞いに来られたが、その時皇后さまが手向けられたのは皇居のお庭に咲いた水仙の花だったと聞く。
水仙は静かな優しさのある花、それでいて芯のある花のように思う。

春が来る　　想い出の日々の歌(5)　　(2015．3)

土居　朋子　　(美賀多台)

前を行く制服の少女がスキップをす日脚伸びたる春の夕べに

この時期、春は名のみの風の寒さよ･･･と歌われているように風にまだまだ冷たさが残る。それでも、日差しが柔らくなり、日毎に日の暮れが遅くなっていく。春の訪れが近いことを感じながら、この寒さももう少しと気持ちを立て直す。

制服の少女は思わずスキップをしたくなるような何か嬉しいことがあったのだろうか。それとも単に動作としてのことだったのだろうか。後ろを歩いていた私には共に春の訪れを喜んでいるような、そんな気持ちの表れのように思え、印象的な光景として記憶に残っている。

ところで,子供の頃の私の早春の思い出は妹や友人達と川の土手などで土筆摘みをしたことで、私は土筆の卵とじが好きだった。指先を黒くしながらはかまを取るのは手間のかかる作業だったが、子供心に春の訪れを感じたものだ。

その卵とじだが、大人になって食してみると、そう美味しいものではないというのが正直な感想だった。また、数年前、友人達との会話で土筆ご飯や、お浸しもあると知ったが土筆を摘む機会もなく今だに試していない。

こちらでの春の便りと言えば、いかなご漁の始まりだろう。すっかり風物詩となっていて、2月も残り少なくなった頃からいかなごを炊く甘辛い匂いが柔らかな早春の日差しに包まれて家々から漂ってくる。

当たり前の風景だが、私たちは釘煮で春を知ることを喜びとしたい。

5月の青空　　想い出の日々の歌(6)　　(2015．5)

土居　朋子　　(美賀多台)

故郷(ふるさと)の古稀と米寿の母2人空は青しと五月の電話

入園･入学の季節も過ぎたこの時期、巷の商戦は五月の母の日に向かって活発になってくる。スーパーやデパートのチラシ、ネットの広告などは、幾つになっても女性心をくすぐり、見るだけでも楽しい。

私も母へのプレゼントをあれこれ考える。本人に尋ねればいいのだが、母はきまって「もう要らないから」と言う。

この短歌を詠んだ頃、米寿の姑と古希の母は2人とも穏やかな老後の日々を過ごしていた。しかし、今、既に姑は亡くなり、母もすっかり年老いてしまった。

初夏の天気の良い日に、元気な声を聞くことができるのは当たり前のことのように思っていたが、それはささやかな幸せの一場面だったのだ。

夫と私は同郷なので、2人はきっと同じ青空を見ていたのだろう。

新月　　想い出の日々の歌(7)　　(2015．7)

土居　朋子　　(美賀多台)

新月がビルの向こうに輝いて「きれいね」と声交わす赤信号

新聞紙面や折り込み広告での旅の案内を見るのが好きだ。すでに行った所はあれこれと懐かしく思い出し、まだ訪れてないところは案内や写真を見ながら想いを膨らませる。

その案内に、最近はお1人様可、或いはお1人様の参加限定とあるのをちょこちょこ目にするようになった。これも現在の社会の多様性を現している。

私も1人で行動するのは嫌いではなく、買い物や映画などは1人のことが多いが、ただ日帰りも含めツアーには未だ1人で参加した経験がない。美しい景色を見たり、美味しい物を味わった時に共に感動したり、喜んだりする仲間がいるとその感動や喜びはより大きくなるが、大勢の中にいて1人その相手がいないのは残念だしまた寂しい。

夜の交差点で青信号を待つ7、8人の人達。見つめる信号のその先、上方に新月が輝いている。普段は皆無言で信号が変わるのを待つが視線の先の月を愛でながら思わず束の間言葉を交わす。ただ、信号を待つ者同士だが共にこの感動を分かち合わずにはいられない、そんな気持ちで。周りの黙っている人達も想いは同じではないかと察せられる。

だが近年スマートフォンを持っている人が多く、歩いていてもただひたすら手元を見つめており、彼らには多分月を愛でる余裕はないだろう。。

また私自身も含め、見知らぬ人とは声を交わさない風潮の世の中になりつつあり，このような場面に出会うことはこれから少なくなっていくのだろう。

譲る人　　想い出の日々の歌(8)　　(2015．8)

土居　朋子　　(美賀多台)

譲る人譲られる人黙(もだ)すまま昼の電車は闇に入り行ゆく

日本人が見知らぬ人と会話をしなくなったその背景には、コンビニが増えたことと自動販売機の影響が大きいと言う説を読んだことがある。

確かにコンビニは便利だ。田舎ならともかくちょっとした地域ならあちこちに店舗があり、夜も遅くまで営業している。近年は品揃えも豊富で、また、各種のサービスも充実しており一言も言葉を発しなくても買い物やサービスを受けることができる。

だが、目の前の相手と会話をしない、話さないことが常態化してくると、いざという時に心の内では思っていても言葉として出なくなるのではないかと思う。電車内で席を譲る時も黙って立ち、譲られた方も黙って座る。傍にいて、お互いに「どうぞ」「ありがとう」の一言があれば気持ちが良いのにと思うことがある。

ところで、以前面白い光景を見たことがある。ちょうど高校生の下校時間帯に3人の高齢の女性が乗り込んできたが、あいにく空席がない。3人はたまたま3人の女子高校生の前に立ったのだが、高齢女性の1人が「席を譲ってもらおうと思うたらあかんよ。このこらも学校で疲れとるんやからな。立っとこ。」

高校生達は多少苦笑いをしながらも「どうぞ」と言って席を離れたのは言うまでもない。高齢者は口々に礼を言って座り、そのあとには和やかな空気が流れた。

私自身は、数年前席を譲ったら、すぐに近くの若者が私に譲ってくれたことがある。そのことを家族に話すと、息子から「お母さんはもう譲る歳じゃないよ」と言われ、傍目にはそう見えるのだと自分の年齢を思い知らされた。

大きな文字　　想い出の日々の歌（9）　　（2015．11）

土居　朋子　　（美賀多台）

母に宛て大きな文字の文を書く幼児（おさなご）に書きくれし日のように

少し前から「お片付け」「断捨離」「老前整理」などが盛んに言われている。「体力のあるうちに」とのことで私も取り掛かってみるが、夫々思い出もあり、また物を捨てられない性分でなかなか捗らない。

先日、郵便物の整理を試みた。私は筆まめな方で、いただくのも多く少しずつ整理しているもののまた増えている。できるだけ厳選して残そうと思い、始めたのだが・・・

心のこもった絵手紙や好みの絵葉書はもちろん処分できない。故人となった友人・知人達からのは思い出がよみがえり手放せない。更にここ最近は孫たちからの手紙がありこれは大事な宝物。
圧倒的に多いのは母からの葉書、手紙の数々。私が18歳で家を離れて以来、本当に多くの手紙を書き送ってくれた。現在のようにパソコンや携帯などの手軽な手段がなかったからだが、母もまた筆まめな人だった。今にして感謝の思いで一杯だ。だが、もう高齢になった母からの手紙は届かず、私からの一方通行になっている。

「おばあちゃんの思い出として記憶に残れば嬉しい」と言って、折々にわが家の子供たちにも少し大きめの字で書いた葉書が届き、それを受け取って喜んでいた子供たちを思い出す。そして、今私は母と同じように大きめの字で孫たちに手紙を書いている。
過ぎ去った歳月をあれこれと思い、懐かしい人々を偲んで片付けは思うように進まず、結局今回もあまり目的を果たせなかった。

雪景色　　想い出の日々の歌(10)　　(2016．2)

土居　朋子　　(美賀多台)

東京に雪2センチのニュース故郷は昨日も今日も雪降り積むに

この冬は年明け半ばまで、日本列島各地記録的な暖冬となり過ごしやすいと喜んでいた。正月などはまるで早春のような暖かさで違和感さえ覚えた。ところが大寒近くなって一転寒波到来、首都圏は雪となり週明けの交通機関は大きく乱れた。影響を受けた人は多く、ニュースは大きくその様子を伝え当日朝のNHKでは大半の時間を割いて報道していた。　そんな時、雪国出身の友人の言葉を思い出す。2cmの雪が東京なら大ニュースとなるの？　これは彼女だけの思いではなく、同じような気持ちの人は多いと思う。

言うまでもなく雪景色は美しく、以前関西在住が長かった知人が札幌に転居となって、『冬の朝、白一色の世界は息を呑むような美しさです』と便りを貰ったことがある。また、最近はその景色や、ウインタースポーツを求めて北海道にはオーストラリアや東南アジアなどから訪れる人が多いとか。

私自身は比較的温暖な地に生まれ育ち、大雪の大変さなどは殆ど経験してないがそれでも結婚後住んだ土地で何度か大雪ならぬ中雪程度の経験はある。それまで雪はすぐに溶けるものと思っていたが、日蔭などではなかなか溶けないものだと知った。また、2年前このあたりでも6、7cmの

積雪があり、我が家の北側の屋根ではそれがなかなか溶け落ちず、日が射してきてやがてドサドサと大きな音と共に雪塊が落ちてきたのにはびっくり。少しだけ雪国の人の暮らしを想った。

ところで忘れられない場面がある。もうずいぶん前、夕方近く三宮からの地下鉄がトンネルを抜けると一面銀世界。三宮では全くその気配がなかったのに、正しく『雪国』の光景で、車内から一斉に喚声が上がったのは言うまでもない。

くぎ煮の春　　想い出の日々の歌(11)　　(2016．4)

土居　朋子　　(美賀多台)

いつのまにくぎ煮づくりも習いとなる転勤族の七度目の春

近くの公園で鶯が鳴き、取り取りの花が咲いている。まさに春の情景だ。

春の訪れは鳥のさえずり、花や野菜、風や日差し、地域によっては雪形などと様々なもので知り得るが、この辺りでは『いかなご漁』も入るだろう。

漁の解禁を待ちかまえて炊くくぎ煮。初めて知ったのはこの地へ転居してからのことで、引っ越しの片付けも一段落したころ足を延ばした市場の店先で、甘辛い匂いをさせて大鍋で炊かれていたものがあり、それがくぎ煮だと教えてもらった。

数年は自分で炊くことはなくいただいてばかりだったが、いつしか私も量はさほど多くないものの炊くのが春の行事となっている。

いかなごを買い求めるときは往々にして列ができるが、並んでいる間見知らぬ主婦同士すぐにいかなご談義に花が咲くのが何とも面白い。「大きい、小さい」「昨日、あの店は〇円だった」等々。ちなみに今年は「いつもよりずいぶん高い！」の声がよく聞かれた。

このくぎ煮は阪神淡路大震災の後、お見舞いや応援のお礼として各地に送られ知られるようになったとか。

私も毎年各地に送っているが、手紙を書き、一緒に送る菓子を買い求め、小包の用意をしてと、これがなかなかエネルギーの要ることで、7、8カ所分を発送し終えると春の一仕事が終わったとほっとする。

その頃には最初は覚束なかった鶯の鳴き声もホーホケキョとはっきり聞こえるようになり、春が長けているのを感じる。

コロポックル　　想い出の日々の歌(12)　　(2016．8)

土居　朋子　　(美賀多台)

菜園のトマトきゅうりの葉の茂りその実採る朝(あした)吾はコロポックル

この時期、夏の陽射しをたっぷり浴びて育った野菜が美味しい。我が家にも子猫の額のような菜園があり、冬はあまり熱心でないが夏は例年、夫がトマトきゅうりなどを丹精して育てている。夏野菜は成長が早く、ことにきゅうりは小さな実をつけたと思ったらすぐに大きくなる。トマトと違って葉と実が全く同色なので気づかずにいるとヘチマのようになっていることがあり、取り損ねないようにと大きく茂った葉をかき分けて探す。

ところで、コロポックルはアイヌ伝説に登場する小人で≪蕗ふきの葉の下に住む人≫の意味だと小学生の時に知ったが、どうにも納得がいかなかった。私の知っている蕗は、いくら小人とは言え、住んだり隠れたりするには小さすぎるとずっと思っていた。だが、先年北海道に行き、かの地の蕗を見て驚いた。道路脇などに群生するそれは、こちらのとは全く種類が違い傘の代わりにもなる、まるでハスの葉のような大きさで、これなら小人が住むことができるかもしれないと長い間の疑問が解けた思いがした。

さて、ピークの頃には食べきれないほどだった野菜も、そろそろ収穫の時期を終えようとしている。その傍らでは、水引草の小さな赤い花が少しづつ数を増しており、暑い中にも季節の移ろいを感じる。また、来年もコロポックルになれることを願いつつ。

天城峠を歩く　　想い出の日々の歌(13)　　(2016．11)

土居　朋子　　(美賀多台)

奥山に紅葉ふみ分けなく鹿の声きく時ぞ秋は悲しき

猿丸大夫　(百人一首)

10月中旬熱海に1泊する機会があった。翌日夫とJR、私鉄、バスを乗り継ぎ天城路へ向かう。修善寺から乗ったバスは温泉街を通り過ぎ、途中浄蓮の滝を右手に山の奥へと入っていく。

ウィークデイでもあり、車内はまばら。両側の山々はよく手入れされ、紅葉にはまだ早いが気持ちの良い景色が続く。旧道との分岐点

で下車。ここから川端康成の名作「伊豆の踊子」の舞台となり、今は「踊り子道」と呼ばれる旧道になる。

約1時間との案内を頼りに歩き始める。車も通行できるが、見かけたのは数台のみ。歩いている人は誰もいない。右手の山は見通しが良く渓の流れが見える。間もなく左手に「踊子」の一文を刻んだ川端の碑。

やがて、国指定重要文化財の天城山隧道(トンネル)へ。446mの直線なので入口から出口を見通すことが出来る。隧道内は堅牢な石造りで私でもその技術の高さを窺い知ることが出来た。半分ほど過ぎたころ、前方から3人連れの姿がシルエットとしてきれいに見える。

隧道を出てほどなく、静寂をついて「ケーン、ケーン」という高い声が二声、三声。鹿の鳴き声と分かり夫も私も感動する。上記の和歌を思い浮かべた。オス鹿は秋になるとメスを呼んで鳴く習性があるという。哀愁を帯びたこの声はその後しばらくしてもう一度聞くことができ、今回の踊り子道歩きに思いがけぬプレゼントをもらった気分になった。

やがて道は新道と合流。再びバスに乗り、河津に向かった。

（追記）

この文を書いた後、鳴き声はどうやら鹿ではなく雉子きじだったことが分かった。その後実際に鹿の声も聞いたが、全く違っていて、二人して完全な思い込みにおかしいやら、赤面するやら･･･。

正月を待つ　　想い出の日々の歌(14)　　(2017．1)

土居　朋子　　(美賀多台)

指折りて正月を待つ嬉しさを知らぬ子の増え毎日がハレ

この時期、街は賑やかだ。いたる所でクリスマスソングが流れ、クリスマス商戦も盛り上がっている。子供たちにとってはプレゼントにご馳走、ケーキと心楽しいことだろう

25日が過ぎると次はお正月。お年玉に正月のご馳走(必ずしもお節ではないかも知れないが)と続きこれもまた楽しみに違いない。

今はよほどの季節のものでない限り、多少の努力をすれば美味しい物、食べたい物を手に入れることができる。子供たちも美味しいものを当たり前として食べ慣れている。

私が子供の頃はお正月だけ、お祭りだけしか食べられないものがあり、その日をワクワクしながら待った。

お正月だからお餅があり、餅つきは大きな正月準備だった。父や叔父たちが掛け声も威勢よく搗いたのを、祖母や母が手際よく丸めていき、どんどん餅が並んでいく。出来立てのお餅は温かく柔らかく本当に美味しかった。毎年、嬉しく楽しみだったその光景を今もはっきり思い出すことができる。

毎日、美味しい物が食べられることは一見幸せのように思える。しかし大きくなってあの時の、あれが忘れられないという記憶が残るだろうか。そういう意味で、案外私たちは幸せだったのかもしれないと思う。

一方、日本の子供の貧困率は年々増加しており、2012年発表の厚労省の国民生活基礎調査によると、子供の貧困率は16．3%、約6人に１人の割合になるという。

疑似体験　　想い出の日々の歌(15)　　（2017．7）

土居　朋子　　（美賀多台）

八十歳の疑似体験をした日には愚痴言わぬ母の日々を想えり

以前、眼の炎症で数日間片方に眼帯をしたことがあった。普段は両眼で物を見るのが当然で、それが片方のみになると、何とも見づらく平衡感覚に不安を感じたのを覚えている。

最近妊婦の妻を少しでも理解しようと、夫による疑似妊婦体験の企画があると聞く。体験することによって、初めて分かることばかりで、その重さ、しんどさなど男性には驚きで改めて妊婦を思いやる気持ちになるようだ。

かなり前のことだが、私は80歳の疑似体験をしたことがある。両膝に砂のうで重りを着けると、脚が重くてうまく歩けず更に段差が怖い。耳も何やら聞こえにくい。80歳の両眼でしっかり見たはずの景色はうすぼんやりとして、普段の様子とは全く違い衝撃的だったのを覚えている。

全ての人がそのような状態になるとは限らないが、老いると言う現実を教えられた。思えば、当時80歳に近かった母も具合の悪いところの一つ、二つはあったことだろう。遠く離れており、余計な心配をかけまいとの配慮からか母から愚痴めいたことを聞いた記憶がないが、あの頃母はどんな思いで日々を過ごしていたのだろうか。

どちらかと言うと　　想い出の日々の歌(16)　　(2017．11)

土居　朋子　　(美賀多台)

レマン湖のほとりのカフェで私あての絵葉書を書く旅の終わりに

どちらかと言うと、若いころから手紙を書くのが好きなほうだ。以前は便せんにしたためることも多々あったが、今は専ら葉書を用いることが多く、それも官製葉書ではなく絵葉書や絵入りのそれを使うことが殆どだ。

旅先でもつい絵葉書に目が行き、買い求めることが多い。しかしいざ使おうとなるとこれはきれい！これは旅の思い出に！と、手元に取って置きたくなり、それらが今ではずい分たまっている。中には郵便番号5桁時代のもあり自分でも少々呆れているところだ。

一方、それに伴う切手も相手や季節、文面に合わせたいと思い　ついつい必要もないのに買ってしまいストックがたくさんある。昨今は次々と心惹かれる記念切手が発売され、また最近は小学生の孫たちとの手紙のやり取りもあって、彼らに合うものをと思い買い足すものだから手持ちはなかなか減っていかない。

切手をため込んでいる人は結構多いようだ。先だっての新聞エッセイに、母親や友人から届いた郵便物に古い切手が縦に長く貼ってあり、驚いたとあった。それに対して、古い切手をたくさん持っていると言う人が私も私もと名乗りを上げ、切手をため込んでいる人はいっぱいいると分かり、おかしくなった。

初めてのマレーシア訪問　　(2018．2)

土居朋子　　(美賀多台)

関空から6時間(時差は－1時間)マレーシアクアラルンプール(KL、人口約180万人)に住む長男宅で年末年始を過ごした。

真冬の日本から赤道付近の南国へ。この時期は乾季でもあり燦燦と輝く太陽と青空をイメージしていたが、1週間余りの滞在中、午前中は曇り午後になり薄日が差し夕方から夜にかけスコールという日が多かった。ただ、こんな天気は珍しいとのことだったが気温は26～28℃くらい、湿度は低く観光には楽だった。

マレーシアは多民族国家で、マレー系、中国系、インド系その他少数民族の人々が暮らすが、海外からの駐在員も多く、年末年始のKLセントラル駅(ちなみに設計は黒川紀章)は様々な人たちが行きかい、それに伴うファッションも様々で見ていて面白かった。

また、駅に隣接するショッピングモールのフードコートもお国柄を反映して多種多様な料理が並んでいたが、イスラム教の国なのでさすがにアルコールはなかった。ただ、街では飲酒できる店も多く息子達と食事をするときは、アルコールに困ることはなかった。

国教はイスラム教で、最大の祝日はラマダン明けとなり（年により日が違う）年始は1日が休みのみ。イスラム教徒にとって1日5回のお祈りは大切な務めで、私たちが見た限りでもホテルや公園の一角、ガソリンスタンドなどに祈りの場所が用意されていたし、職場にも勿論あるそうだ。

市中心部の息子宅では毎早朝、近くの寺院からマイクを通してお祈りの声が聞こえ、異国情緒を味わった。更に金曜日午後のお祈りは特に大切でこの日寺院に行くのは男性の重要な役割とか、巻きスカートのような民族衣装を身に着け、小さな帽子を被った人たちが寺院に向かっている姿を多く見かけた。まさに宗教が生活の一部となっている。

さて帰国の夜夫と２人KL国際空港に着き、あれこれ迷った挙句に入った店で「ノー、ビール」のつれない一言、ああここはイスラム教の国だと最後に思い知ったのだった。

初めてのマレーシア訪問（その2）　（2018．5）

土居朋子　（美賀多台）

クアラルンプール（KL）国際空港から市の中心部までは約４０Km、空港近くには手入れの行き届いた緑濃いパームヤシ園が広がっており、この国は世界有数のパーム油生産国で、パームヤシは今再生可能エネルギーとして注目されているとか。

一方、マレーシアは日本ほど公共交通機関が発達しておらず、車社会で、市の中心部に向かうにつれどんどん車が増えてくる。かつてこの国はイギリスの植民地だったこともあり、車はイギリスと同じく左側を走る。

車間距離を取らず、また殆どの車が指示器を出さずにいきなり前に入ってくるのでびっくりすることが何度もあったが、運転する息子はもう慣れているようだった。トヨタ、ホンダなどを含め大きな車が多く、軽乗用車はあまり見かけなかった。郊外では時々逆走している車もあるとかで、私も

バイクが逆走しているのを見かけた。バイクの数も多かったが、他の東南アジアの国々で見かけたような１台に３人も時には４人も乗っている光景はあまり見かけなかった。

郊外の道路は3、4車線で更に、中央分離帯や防音壁がないので、開放感があり走っていて気持ちが良かった。ペナン島まで車で行ったがこのコースはトンネルもなく、起伏も少なく山国日本の道路とは全く趣が違っていた。

一方、息子達の住んでいる中心部は山を切り開いてできた地域とかで、こちらは起伏が激しく、歩道も補修されないままの所もあり、自転車に乗っている人は見かけなかった。

小学生の孫も外出は車のことが多く、日本人学校へはスクールバス通学なので歩くことがめっきり減ったとか。自転車に乗ることもなく中には自転車に乗れないまま帰国する小学生も出てくるそうだ。

娘の成長　　想い出の日々の歌(17)　　（2018．9）

土居　朋子　　（美賀多台）

いつのまに2人の立場入れ替わる娘(こ)はゆったりと祖母に語らう

４人の孫がいるがいずれも県外に住んでおり、会う機会はそう多くない。久しぶりに会うとその心身の成長ぶりに驚くことも度々だ。

数年前、４年生くらいだったと思うが訪れていた孫宅を去るとき、いつもの「バイバイ、また来てね」の後に「気をつけてね」の言葉が続いた。思いがけないその一言に孫の成長を感じ、驚きとともに、感慨深いものがあった。孫はいつまでも庇護の対象ではなく、どんどん成長している！そう感じた瞬間だった。

私たち夫婦は結婚後ずっと親元を遠く離れて暮らしてきたので、双方の両親とも同じような思いをしたことがあったかもしれない。

かって幼い娘にゆっくりと話しかけていたのは私の母の方だった。しかし気がつくとそれはもう過去のことで、いつの間にか小柄な母の背を追い抜き、労りながらとゆっくりと話しているのは娘の方だった。いつの間にか２人の立場が変わっていた。

それは私にとって娘の成長と同時に母の老いを教えられ、ちょっと複雑な気持ちになった場面でもあった。

4月の雛祭り　　想い出の日々の歌(18)　　(2019．4)

土居　朋子　　(美賀多台)

七段の雛を飾りしおぼろ夜は２人の会話も少し弾めり

雛祭りは一般的には３月３日だが、私の故郷では月後れの４月３、４日が雛祭りで『お雛さま』と呼んでいる。昨今は全国的に桜の開花が早くなったが、子供の頃はちょうどお花見の時期で、お雛さまとお花見はセットで『お節句』と言い、楽しい年中行事の一つだった。

当日は母が朝早くからご馳走を作る様子を、心躍る思いで見ていたのを想い出す。子供の弁当箱は３段の引き出し式で、これに普段はめったに口にすることのない巻きずし、いなり寿司、厚焼き卵などが詰められた。

また、お節句にはどの家でも『にぎり豆(おこしを丸く握った郷土菓子、今ではひなおこしとして市販されている)』を作った。これは今でも我が家の好物で、季節になると材料を取り寄せ作っている。

さて、我が家のひな人形は･･･

娘が初節句を迎えた時住んでいたのは地方の古い戸建てで、大きな床の間があり、私は迷うことなく七段のセットを買い求めた。その家に３年住んだ後は床の間のない家を転々としたので、内裏雛や屏風など一部のみを手元に置き他は実家に預けた。

歳月を経て今の家に転居し久しぶりに段飾りをした時、娘は高校生になっていて、数年後彼女は家を離れ、夫婦２人の暮らしに七段飾りは華やぎを与えてくれた。

今、その人形たちは娘宅で孫娘の成長を祈って飾られている。

白き十字の花　　想い出の日々の歌(19)　　(2019．7)

土居　朋子　　(美賀多台)

ドクダミの白き十字の花を挿し独り居の母何を思うや

今年も庭の一隅にドクダミの花がたくさん咲いた。

この家に入居する際前の住まいから数本持って来て植えたのだが、歳月と共に増えてきた。

ドクダミはその独特の強い臭いもあって嫌う人もいるが、私は十字の白い小さな花とハート形の濃い緑の葉を持つこの植物が好きで、家族には少々疎まれているが大事にしている。

花の頃には 2、3 輪を、あるいは束にしたのを飾るのも好きだ。

ドクダミは別名十薬とも言い漢方薬などにも用いられているのは良く知られている。子どもの頃、軒先に乾燥したのが下がっていて、身体の具合の悪い時など、その煎じたものを飲まされたのが遠い記憶に残っている。

以前、ドクダミ酒の紹介記事を目にしたので作ってみたがこれは不味くて、どうにもならなかった。またドクダミ化粧水も作り、たくさんできたので友人知人達にプレゼントしたこともある。

先日は知人からドクダミ、よもぎ、ミント、柿の葉などで作ったお茶を頂いたが、味が濃く、ハーブティーの好きな私は美味しく頂いた。

私が毎年恒例としているのはドクダミ茶をつくること。 花の盛りの晴天が続くころを見計らって刈り取り、適当な長さに切り、洗った後天日で干す。濡れてしまうと台無しになるのでその間は雨に気をつける、また乾いてくると軽くなって風で飛ぶので風も要注意。

今年は幸い晴天が続き 3 日ほどできれいに乾いた。

我が家ではこれを市販のドクダミ玄米茶とブレンドして長年愛飲している。

今ではすっかり慣れ親しんだ味となっており、全く違和感はない。

そんなわけで、私にとってドクダミは仇やおろそかにできないのです。

私の正月仕事　（2020．2）

美賀多台　土居朋子

この正月、遠方に住む家族や親戚を迎えて過ごしたお宅もあったことでしょう。我が家でも 2 家族 8 人が来泊し、それぞれ 2 泊と 3 泊して帰っていった。

大勢になると食事もさることながら、冬は特に寝具が大変！！

12 月半ばから天気の良い日を見計らって少しずつ干し、今回 8 人で 6 組の寝具を用意した。（母子 2 組はそれぞれ 1 組を使用）

大変なのは後始末。皆が帰った後は布団を干し、カバー類を洗濯、糊付けするが、暖冬とは言え冬の日差しは弱くなかなか捗らない。干した後はカバー類を掛けて収納している。今は羽毛布団で軽く扱い易いがそれでも小柄な私はベランダの手すりに敷布団を干すときなど時に布団と格闘状態になることがある。

一時レンタル布団を利用したこともある。使用後はカバー類を掛けたままで 収納袋に入れ、あとは宅配業者の集荷を待つだけで楽なことこの上なかった。ただ私の利用した業者は1～5泊の利用なら同一料金なので、2、3 泊の利用では割高になっていたのは否めない。

さて年明け同年代の友人たちに会うと、開口一番「今年は泊まり客がなく楽だった」

「布団の扱いが大変なので近くに住む息子に手伝ってもらった」

「カバーもかけて用意して息子達を待ったが病人が出て帰れず、結局また元に戻した」と夫々の苦労話が相次いだ。

正月明け、部屋の一角で小山状態になっていた寝具だが、晴天ばかりが続くわけでもなく、なかなか山は小さくならない。1月も終わろうとする頃、ようようその形がなくなった。やれやれこれで一ケ月あまりに及ぶ私の長い正月仕事がやっと終わった。

名画ふたたび　　想い出の日々の歌（20）　　（2020．8）

土居　朋子　　（美賀多台）

父母と観し名画を夫（つま）とリビングにかの日の父母の齢（よわい）を超えて

今はもう遠い昔のことだが、小学校低学年の時家族 5 人で映画を観に行ったことがある。私の記憶ではそれが最初に観た映画ではなかったかと思う。

作品は『喜びも悲しみも幾歳月』。今、断片的に覚えているのは主演の佐田啓二と高峰秀子が夫婦喧嘩をしていたシーンと、息子の遺骨の入った骨箱を抱いた列車内のシーンのみだが、喧嘩の場面では女性がはっきりと意見をいうのに驚き、列車内のそれでは親の悲しみを想った。子供心にこれは名作だと強く印象に残ったのを覚えている。

まだ白黒映画が多かった時代にカラー映画は色鮮やかで、また若山彰の歌う主題歌も力強く印象的だった。その後長い時を経て TV 放送で再見したが、たくさんの素晴らしい俳優が出演していたことを知って驚き、また改めてその作品の素晴らしさを再認識した。しかし映画の印象としては、今でも圧倒的に幼いころに観た時の方が強く残っている。

当時映画は 2 本立て、或は 3 本立てのこともあったが、この時の他の作品の記憶が全くないのは1本だけしか観なかったのだろうか？共に観た父母は既になく、弟妹も記憶に残ってないとかで今は確かめる術もない。

昭和 30 年代映画は庶民の大きな娯楽で、私の住む地方の市にも5、6 館はあった。それが今では 1 館もなくなったとか。映画は映画館で楽しむ派の私としては何とも寂しく思う。

ところで先のステイホーム期間中は映画館派の私も自宅で幾つかの作品を楽しんだ。自分の都合の良い時に自宅で観るのは手軽で良いものだと思う反面、やはりあの映画館という空間で没頭して楽しみたいという思いは変わらない。しかしこれからは種々の状況からして、両方のスタイルで楽しむようになるのかなと思っている。

親の知らぬ顔 思い出の日々の歌（21）（2021.9）

土居朋子（美賀多台）

新妻と並びて皿を洗う子は親の知らぬ顔また一つ見せ

この頃外でよく見かける光景として、抱っこひもでお父さんの大きな胸に抱かれた赤ちゃんの姿がある。お母さんの優しい甘いそれとはまた違って、さぞ心地良いことだろうと想像する。『イクメン』と言う言葉を耳にするようになってもう久しく、前述のような光景は今ではすっかり当たり前のものとなっている。

さて話はちょっとさかのぼるが、ある春の頃に結婚した息子たちが夏休みに帰省した時のこと。夕食後、お嫁さんは台所に立ち後片付けを買って出たのだが、当然のようにすぐに息子も並んで一緒に食器洗いを始めた。その姿がいかにも自然で、それまで知らなかった息子の姿に驚き、また微笑ましく思ったことを覚えている。

当時、2 人は共働きだったからそれは日常の自然な流れだったのだろうが、大学入学まで共に過ごした日々では母親が専業主婦だったこともあり、そうまめに手伝いをしたという印象もなく、思いがけない一面を見て多少の驚きがあったことも否めない。また、自分の頃と比べて隔世の感があったのも事実だ。

やがて、待望の子供に恵まれ『イクメン』となった彼に、父親としての更に新たな顔を見るのはその数年後のことになる。